2023-11-23　ミーティング

●発表者：辻　明典　福島県公立小学校教諭

●テーマ：SOS をキャッチする～p4c と生徒指導の親和性？～

参加者　一般参加　7 名　　運営委員　6 名　合計　13 名
林部、Jazmin, 奥田、佐藤、三木、松浦、木下：桝形、金澤、森本、北浦、城野、辻

発表要旨

自己紹介にかえて

勤め先は福島県の相馬市。住んでいるのは南相馬市。2011 年の東日本大震災と福島の原発事故の影響を色濃く受けたところ。

地域の背景～自然災害と人災～

図示・数値で表し尽くせない問題がある。風が気持ち悪い、あるいは、長い時間、ここにはいたくないというような感覚を覚えることがある。そう感じたくはないが、感じざるをえないような状況がある。神社の境内に放射線廃棄物が置いてある。

子どもたちをとりまく環境・背景

多くの子どもたち（2011 年は、現在の小学校 6 年生と中学校 1 年生の生まれた年）が、幼少期に、震災や原発事故の影響を受けている。

保護者を含めて、多くの人たちが、災害や国家の迷走に翻弄されてきている

てつがくカフェ＠南相馬でのある大人の発言

原発事故が、みんなを哲学者にしちゃった。「ここで生きるって、どういうことなんだろう？」って知らず知らずのうちに考えてしまう。

このような状況にまきこまれざるを得ず、その中で日々暮らしている。

トラウマ・インフォームドケアの紹介

問題行動の背景には、トラウマという「こころのけが」があるのかもしれないという意識を持って子どもと接する

子どものいわゆる問題行動等は、その子どもの SOS ではないのか？

ケアとしての対話・p4c

相双地区で必要な対話とは？

- 見えてはいないもの、現れてはいないもの、目をこらさなければ見えないものを、見ようとすること
- 問題行動を、SOS とみなす。SOS をキャッチする。
- 「話せる時がくる」まで待てる環境をつくること

実際の授業では？

一般的な授業では、学校における規律・訓練の影響が大きいのではないか。

たとえば、

- 「〈みんな〉で話すこと」になれていない。教師の顔をうかがう
- 「発言者に身体を向けること」に慣れていない。
- 教室の中で言うべきこと、言ってはいけないことは、暗黙のうちに決められている。
- 授業が、「先生の言ってほしいこと」を言い当てる時間になりやすい。
- 「答えのない問い」について話し合う経験が非常に少ない。

授業での実践

教員も、子どもも「対話」を知らないので、繰り返し、何度もやってみて、対話に慣れてもらう。

問題行動をキャッチするには、子どもに「なにか、ありそう…」「何か、あったのかな…？」という予感を持って接する。

「意識しない知覚の中で、知らず知らずに働いている、知覚的な志向性」（メルロ＝ポンティの作動志向性）を感じ取る力が必要ではないか。

私自身の授業経験から①

- 子ども（児童生徒）は、隣の席の人のことを、実はよく分かっていない。
- 子どもも、〈社会〉と無縁ではない。（貧困、障害、エスニシティ、災害、戦争…）
- 児童数が 30 名を超えると、集団統率の指導に偏りやすい（不寛容が生じやすい）。そのため、「セーフティ」な雰囲気を作るために、手間暇をかける必要がある。

私自身の授業経験から②

- 普段の授業で「あまり話さない子」や、「勉強が苦手な子」が積極的に発言することが、よくある。
- 「聴いてもらえる」「聴いてもらえた」という安心感？→そもそも、「自分の話を聴いてもらう」という経験が少ない。
- 「暴力」「暴言」の減少。
- 「相手の話を聴ける」人は、「自分の話を聴いてもらえた」という経験がある人。

困ったときの対処法

- 「セーフティ」を重視する。
- 「様々な立場の人が、ふらっと参加できる」「遠目からのぞける」ことに、実は意味がある。色々な人がかかわっていることが安心感につながる。
- 「人権侵害」「誰かを傷つける発言や態度」「暴言」に対しては、毅然とした態度で対処。ただこれらの態度もその背後にトラウマがあり、SOS の発信ではないかという捉え方は大事。
- →理想はチームで対応する。（一人で抱え込まない）

暴言をする人自身に対する配慮も必要。

Q&A, C.

Q：学校での p4c と学校外での哲学対話との違いは？
A：違いはある。子どもは思考が早い。普段使っている言葉と違う意味で言葉を使ったり、論理に飛躍があったりする。ただその場合でも、その子なりの論理があって、丁寧に訊いていくと理解できる場合がよくある。そして他の子にも理解され、クラスの中にインクルードされていく。そして、その子自身の論理の飛躍もなくなっていく。大人の場合は、落ち着いた対話がまだ可能である。ただ、大人の場合でも、自分の発言をうまく言えず、対話を重ねるにしたがって、自分の思いを伝えることができるようになって、周りからの理解も得られるようになるということはある。大人の場合は、発言を板書して、客観視できるようにしたりする。
Q：具体的な事例を教えていただきたい。
A：例えば円に入れない子には、「何か悩みがあるのではないか。」という予感をもって接している。普段の授業ではあまり話さないが、対話の授業ではよく話すことは、よくある。ボールを持っていることで話しやすくなる。自閉症の子などは視線が怖いことがある。ボールを使うことで、視線がボールに集まるため、恐怖感は減少するのではないか。一方的に話す子がいる時は、ボールを返してもらい、「それって、どういうことかな。」と問い返しを意図的に行い、発言をしてもらう。そのやりとりを、皆に見せていく。これを繰り返していくと、どういう風に対話すればいいのかが、身についていく。
C：P4C の授業の中で、自閉症の子へのいじめが顕在化し、それを指摘することによって、自閉症児へのいじめが克服された。対話によって、クラスの中で蓋をされていたものが見えるようになるということ。
C：中学校の場合には、生徒たちの背後にある人間関係が多いにかかわっていて、特に SNS での影響が大きいと感じる。ただ、教員間の対話ができていないというのが問題だと感じている。教員同士でできないとか教員が対話を知らないのであれば、子どもたちに教えることができるのか、疑問である。研修などでも対話というものがないのではないか。
A：生徒指導主事という立場を利用して、会議では会話をするようにしている。「子どものことについて何でもいいので、職員室でつぶやいてください。」とお願いしている。そして、話をできるような空間を意識的に作るよう努力している。
A：小学校の場合、校内研修の場ではなるべく対話の場を作るように努力している。
C：対話に関しては、普段の生活の中に色々なヒントがあるように思った。グループに関しては、教師の側から作らせるのではなく、自分たちで勝手に作るようにさせていた。そこで新しい人間関係が生まれたり、授業にも影響が与えられていたりした。総合的な学習

の時間ができる前は、学活などを利用して、議論などをしてもらった。その中での楽しさを共有するということが大切だと思った。
C：大学生の間でも対話は成り立っていない感じがする。大学ではどこまで関わっていくのがいいのか、悩んでいる所。授業では P4C 的な手法は取り入れている。舞台づくりという授業があって、この授業は全員参加になっている。このようなプロジェクトの実践は学生にとっては難しいようである。自分を表現するということがなかなかできない。その中で面白いなって思った現象は、授業の 80%は話し合いをしていた。円を作ったり、様々な形を作ったりして、様々なテーマッで話し合いを重ねている。このような過程は必要であったようで、本番では学生なりのイメージを持って、実施できたのではないかと思う。教師になったときに、対話の経験というのがどういう意味を持つのか、その辺を意識して学生と関わっている。
C：コミュニケーションがよくなる要素は何だろうかと普段から考えている。逆にコミュニケーションがうまくいかない場合もあるが、その場合には、どんな要素が欠けているんだろうと思っている。
Q：対話は回数を重ねることが大切だと言うことで、短い時間でも対話すると言っていたが、これはどういうことなのか。
A：授業の最後に 5 分とか 10 分だけ行うという場合がある。例えば理科の場合でも、「授業が早めに終わったから、これから対話をしよう。」という具合で行う。テーマは、その場で決める。子どもに出してもらうこともあるが、自分で面白そうだなと考えたテーマ、例えば「ドラえもんの主人公はだれかな？」で議論する。あるいは朝の時間に、丸くならなくても、議論の時間を作る。
A：その効果はどういう点にある？
Q：子どもにとっては楽しいという感覚が重要で、それが安定につながっているのではないか。時間が余ったからちょっと話そうかというのが子どもにとって楽しいみたい。ボールに触るのが楽しいという感覚も持っている。子どもにとって遊ぶということは非常に大切なことだということを学んだ。哲学対話を子どもにとっての遊びとするために、細切れでもそれを行う。
C：「余っている時間に哲学対話をしようっか」というのは、哲学対話を特別の時間にするのではなくて、授業の一部として普通に楽しめるのがすごくいい。子どもの日常の困り感を言ってもらって、それを P4C 的に皆で議論するということをしている。
Q：今日のようなテーマを辻さんが選んだという背景は？
A：聞いてもらえるという環境を与えられると、重度の障害を持った子でも表情が大きく変わるという経験をしてきた。聴いてもらえるという経験は人生を変える。